

共通

|    |    |      |      |     |    |    |    |    |    |    |
|----|----|------|------|-----|----|----|----|----|----|----|
|    |    |      |      |     |    |    |    |    |    |    |
| 全般 | 計画 | 土づくり | 苗づくり | 植付け | 初期 | 中期 | 後期 | 収穫 | 調製 | 出荷 |

農薬の適正使用

規範項目22

必須・重要・推奨

安

環

## 病害虫・雑草が発生しにくい栽培環境づくり

周辺環境への負荷を軽減するため、化学農薬の使用の低減が求められています。化学農薬による防除を行う前に、作物の栽培方法全体を見渡し、病害虫や雑草が発生しにくい栽培環境を作ることが重要です。

### 取組事項

- ・ 雑草地からほ場への害虫の侵入防止に配慮した適期適切な草刈りを実施する。
- ・ 秋起こしなどにより、病害虫の発生源となる植物を除去する。
- ・ 輪作体系に取り組む。
- ・ 畦畔には雑草が発生しないようにカバープランツを植栽する。

化学農薬による周辺環境等への影響を少なくするためには、病害虫や雑草の発生しにくい栽培環境を作ることが重要です。

ほ場周辺の除草の徹底や病害虫の発生源となる植物の除去など、作物ごとの栽培体系に応じた病害虫等の発生しにくい栽培環境づくりに積極的に取り組みましょう。

#### 【畦畔等の草刈りの徹底】

斑点米カメムシ類などは、畦畔の雑草で生息し、水田に侵入してくることが知られています。斑点米カメムシ類に対しては、ほ場への侵入前に発生密度を低下させるため、出穂の2週間前までに畦畔の草刈りを地域で一斉に実施するとともに、その後は、雑草の穂が出ないように定期的に草刈りを実施しましょう。（図1～4）

また、水田内のヒエ、ホタルイや麦あとほ場の雑草も斑点米カメムシ類の発生の原因となるので、繁茂しないように適切な管理に努めましょう。（図5）

#### 【秋起こしの実施】

秋起こしは、稲わら等の植物残さを土壌にすき込みむことにより、腐熟を進め、病害虫の植物残渣中での越冬などを防止する効果があります。秋起こしは、稲収穫後から10月中旬ぐらいを目途に行いましょう。

病害虫の発生について、秋起こしを行った場合は、春に耕起した場合や、無処理（耕起しない）の場合と比べて、ニカメイガの冬期幼虫密度が低減することが明らかとなっています。また、塊茎で増殖する雑草についても防除効果が見込まれます。

#### 【輪作の実施】

大豆や大麦など畑作物は、連作することによって特定の病害虫や雑草が多発するようになり、防除回数が増加し、生育や収量、品質の低下につながります。このため、作付けほ場をローテーションしたり、作付品目をかえたりする輪作に取り組ましましょう。

## 【カバープランツ(被覆植物)の活用】

カバープランツを用いた畦畔の管理により、畦畔の雑草を抑えることで、病害虫の発生や増殖を防ぐことができます。カバープランツには、センチピードグラス、ヒメイワダレソウ、アジュガレプタンス、アップルミントなどの植栽事例があります。(図6)



アカヒゲホソドリカスミカメ

- 体長: 5~6mm
- 寄主植物: イネ科植物



アカスジカスミカメ

- 体長: 4.6~6mm
- 寄主植物: イネ科植物、カヤツリグサ科植物

図1 斑点米カメムシ類の特徴

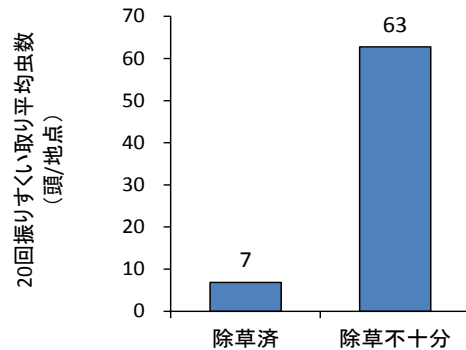


図2 畦畔の雑草管理と斑点米カメムシ類の捕獲虫数 (H26農研病理昆虫課 7月中旬調査)  
除草済: 適切に雑草管理されている地点  
除草不十分: 出穂したイネ科雑草が多く、管理が不十分な地点

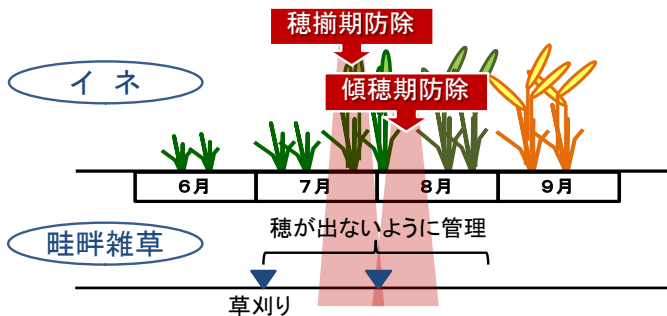


図3 畦畔の草刈り方法(イメージ)



図4 地域ぐるみの畦畔の一斉草刈り

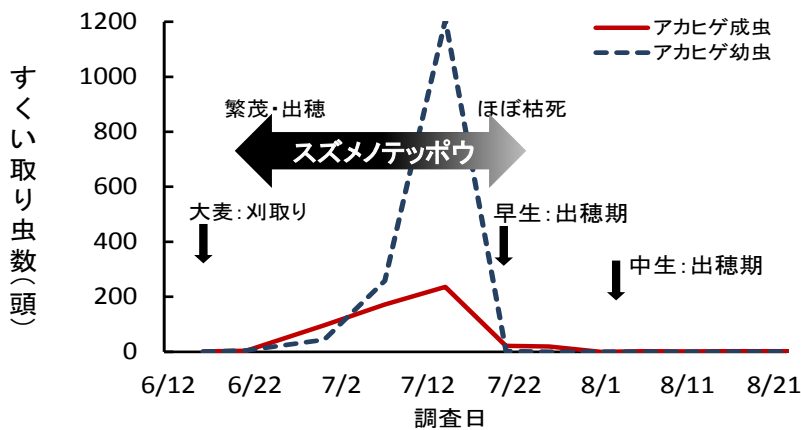


図5 麦あとほ場におけるカメムシ発生状況 (H26農研 病理昆虫課 20回振り)



図6 カバープランツ(被覆植物)による畦畔管理の事例  
左: センチピードグラス(富山市内)  
右: アジュガレプタンス(富山市内)

## 【根拠法令等】

- 環境と調和のとれた農業生産活動規範について (平成16年度農林水産省通知)
- 総合的病害虫・雑草管理(IPM)実践指針 (平成17年度農林水産省公表)